

日英語音の異同と民族性

豊田, 實

<https://doi.org/10.15017/2556544>

出版情報 : 文學研究. 33, pp.27-39, 1943-12-30. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :



日英語音の異同と民族性

豊田實

丁抹の言語學者イエスベルセン (Otto Jespersen) はその著 *Growth and Structure of the English Language* の初めにおいて英語の特質を論じ、それは音の上にも現はれてゐることを述べてゐるが、之を要約すれば次の如くである。

英語では (一) 單音、殊に子音は各々明瞭な音で (例へばオランダ語におけるが如く子音が母音の「わたり」か聞き分け難いやうな音がなく)、少なくとも近代英語においては母音も周圍の音から影響されることが比較的少ない。(二) 實際の言語における音連續の上で子音 (即ち多少の摩擦を伴ふ音) と母音 (即ち聞える程の摩擦を伴はぬ音) との割合が恰も男性的の印象を與へるやうになつてゐる。但し (三) アクセントが習慣上心理的に (必ずしも語源的にでなく) 重要な音節にある結果として、單語中のアクセントの位置が初めから機械的に定つてゐるフランス語やイタリヤ語などの場合よりも、アクセントの有る音節と無い音聲との間の強弱の差が顯著であり、アクセントの有る音節を強調する場合、この特徴が一層烈しくなる。(四) 歴史的には語尾脱落から結果した一音節及び少數音節の語が多い。(五) 情緒の抑壓から來る低聲での談話が英國風教養の一特徴をなしてゐる。以上の發音上の諸點、なほその他の考察からイエスベルセンが到達した英語の性格は、精力的で、事務的で地味で、達意を旨とし、文法上その他の規則による拘束を嫌ふ

といふことである。然しまたその結果、さうした日常語が「諧調」とか「優雅」といふやうな點において缺くところあることも當然認めなくてはならず、イエスベルセンは是等積極的及び消極的方面において、英語が英國々民性を反映してゐることを指摘してゐる。

英語音の以上のやうな特徴に比較して、日本語音は如何なる民族性を啓示してゐるであらうか。先づ日本語において母音の割合が英語よりも多いことは、日本國民性の優美な點を反映してゐると言ひ得るであらう。なほ英語では *p t* 等の破裂音の後に氣音が伴ひがちなのに日本語ではさうでないことは、鼻子音の種類及び用法において邦語がもつ特徴と共に、わが日本語に柔か味を賦與するものである。鼻子音に就いて述べれば先づ邦語には英語の *n* (エス) の音と區別さる可き「ン」の音がある。尤も日本語にあつても「ナ」行の音の子音部及び次の諸例の如き場合の「ン」は(後續音との關係上)英語の *n* と同種の音である——セントー、パンチ、シンダイ、サンデュー、サカンナ、シンニ、シンニ、ペンレイ、ゼンリク等。然るに次の諸例における「ン」は、舌の先を一旦上前齒の後の齒莖に着けて鼻腔からのみ發音する英語の *n* とは異なり、舌先は齒莖に着けず、口と鼻から自然に發音される一種の鼻子音であつて、英語には無い音である——サンセイ、ギンザ、キンジヨ(キンヂヨと區別して)、デンシヤ、デンワ、カンヨ、コンイ等。なほ邦語では語尾の「ン」にもこの音が使用される。次に鼻子音「ム」即ち *m* の音は日英何れの國語にもあり、場合により語間で是が長音になり得ることも兩國語において同様であるが、「梅」・「馬」・「旨い」などの口語の發音即ちシメ、シマ、シマイなどにおけるが如き語頭における *m* の長音は英語にはあり得ない例である。「グ」の子音部を鼻音化したものは日英語何れにもある。英語では語尾及び語間に此の音が現はれ、日本語にあつて

も語尾の「ン」が是になることがあり、殊に東京語で「ガ」行の子音部が母音に挿まれる場合、概して鼻音化されるのは、之を聞く耳に柔かな印象を與へるものである。

要するに日本語においては、英語に比して母音の割合が多く、烈しい氣音がなく、元來柔かな音色をもつ鼻子音の種類と用法において特徴があることは、英語のアクセントが強弱を主とする強勢アクセントであるのに對して、邦語のアクセントが高低を主とする音楽的アクセントであること等と共に、わが國民性の優美にして調和的の方面を現はしてゐると言ふ可きであらう。然し日本語は決してめづしい言語ではない。日本語には（ローマ字綴で見える以上に）子音の連續（二子音、また三音の連續もある）もあり、子音で終る語（少なくともさうした發音様式）も多少はあつて、男性的の力を加へ、殊に無聲化された母音の存在（例へば東京語におけるキクの「キ」及びツキの「ツ」の母音部は無聲化されてゐる）は日本語に多分の強さを與へてゐる。又邦語の談話における發音様式が、概して口を廣く開かず、發音器官を動かすことが英語のやうに烈しくないのは、婦人にあつての淑やかさのみならず、古來言擧げせぬ大和民族の克己心を現はすものと言ふ可きであらう。尤も情緒の抑制が英語發音様式の一特質であることは、前に記した通りであるが、日本語にあつてはそれが國語發音固有の性格となつてゐる。

なほ日英發音様式の異同に關しては、イー・アール・エドワーズ (Ernest Richard Edwards) の言に吾々の興味を惹くものがある。エドワーズは英國人であるが明治三十年代に我が國に來朝して日本語の音聲を研究し、その結果は *Étude phonétique de la langue japonaise* と題して明治三十六年（西曆一九〇三年）ドイツのライプツィヒで出版され、學位請求論文として巴里のソルボンヌ大學の文學部に提出されたのであつた。世界を股にかけて此の研究論文の

一節に、日本語の發音樣式に就いて著者は次のやうに言つてゐる（高松義雄氏の譯を引用する）「顔いろも變へずに微笑を帯びた顔の表情を理解しようと努めることは單に言語學の見地からのみならず民族心理學の見地からいつても重要な事柄である。日本人は努めて自分の感情をあげつばなしに外部にあらはさないやうにしてゐる。イギリス人は苦しいことまた悲しいことを話すには受身的な單調な調子で話さねばならぬものと信じてゐるが、日本に於ては更にこれ以上である。すなはち、子供の時から喜びでも悲しみでも同じく靜かな微笑を浮べて話すやうに教へられてゐるのである。これは決して人間が冷淡なわけではなく、眞の儀禮は己を制して他人の感情を尊敬するところにあるといふ傳統的な精神のあらはれである。」但し微笑の漣を浮ぶる物靜かな流れも、生命を託する自然の進路を理不盡の巖に遮ぎられるときは、忽ち激して奔流となること、是また湛へた力の現はれとして理の當然であらう。

以上は日英語の發音を全體的に見ての概説であつたが、次には兩國語における文章音調の異同を考察して見よう。

文章音調の問題は日英語共に最近數十年間の研究によつて、漸く學的の系統に達し得たのであるが、比較の便宜上先づ英語の場合から記せば、その文章音調は「第一調」と「第二調」に大別される。「第一調」は(一)完結してゐる叙述、(二)疑問詞を含む普通の問、(三)命令・招待・勧誘、(四)感嘆・感情の勃發等に使用されるものであつて、要するに「的確完結の音調」であり、文章の終りが下向調になるのがその特徴である。是に對し「第二調」は(一)言外に意味を含めた叙述、(二)文章の初めの句、(三)肯定又は否定の答を要する問、(四)依頼・要請等の場合であつて、要するに「言外含意・未完結の音調」であり、文章の終りが上向調になるのがその特徴である。なほ細かな點では兩調の間に、それ以外にも多少の相違があり、且實際の談話に際しては是等の音調が種々に複合することもあり、又強調等の關係から多少の變

形も生ずるのであるが、第一第二兩調差別の要點は以上の通りである。しかも兩調の間には共通の一大特徴があり、その特徴は即ち英語の文章音調そのものゝ性格であり、且一國語の文章音調は文章の意義上の微細な差別、殊に情緒の表現に密接な關係を有するのであるから、この特徴は、その國語の本質、延いてはその言語を母國語とする民族の性格を知る上の一大要件とも考へ得るであらう。さうしてその特徴といふのは、英語では「第一調」「第二調」共に、その典型的な音調にあつては、發端は概して低いが強勢をもつ音節中初めのものが最も高く、後のものは順に低くなつて行くことである。それでその結果長い文章の場合は、間の場合もさうでない場合も、典型的な音調の様式としては、強勢をもつ音節が高いものから低いものへと數段の系列をなし、複合の場合はその形式が繰り返へされることとなる。(且英語の發音におけるこの傾向は文章のみならず、單語の場合も同じであつて、外來語の影響を別とすれば、單語の最初の音節が少なくとも語頭に近い所に強勢があるのが英語本來の傾向である。) 此の現象は果して何を物語るものであらうか、私は日本語における文章音調と之を比較することによつて、その意義の考察を試みたいと思ふ。

日本語の文章の發音においても、終りの上るものと下るものがあるといふ點では、「第一調」と「第二調」があると言ひ得るであらう。然し英語にあつてはアクセントが強弱を主とするものであるために、單語のアクセントは文章の音調とは獨立に存在するのに對し、日本語では單語のアクセントも亦高低を主とするものであるために、文章音調の波中に入つても單語の抑揚を變更しないこと(若し之を變更すれば意味の變化を來すこと「橋」と「箸」におけるが如くである)とも關連して、日本語の文章音調には、英語の場合におけるが如き數段に亘る高低音節の系列はない。即ち日本語の文章における音調の波は初めは低く出發し、上つて又下り、幾曲折を繰り返して、(後で説明する如く

婦人における特殊の音調を除き)多くは低く終るのであるが、英語におけるが如き高低の懸隔はなく、上下の二段又は上中下の三段に區別すれば足りる程度のものである。さうして日本語の語調における此の特徴を英語の語調における前記の型とを比較する時、吾々は既に見た日英發音の一般的差異と根本的には同種の區別がそこにも現はれてゐることを知るのである。即ち英語では文章音調が大きな波状を描き、且飛沫を散らすかの如く終りが上る第二調が屢々使用され、全體の印象が如何にも精力的であるのに對し、日本語談話の音調は春風に撫でらるゝ水面に生ずる漣の如く穏かであるが、單調のやうに見えるその裏には、却つて時間的永續の相を示してゐる。なほ多少細かな區別を論ずるに先立ち、日本語における文章音調の例を擧ぐることにする。

(但し符號の約束は次の如くである。文字の右に棒のあるのは比較的高い音、左に棒のあるのは比較的低い音、棒のないのは中間の高さを示す。またカはガの鼻音を表はし、△は母音の無聲化を示す。完全な無聲音には高低はないわけであるが、無聲化にも自ら程度があるので、△と同時に低音の棒を附した場合もある。(上)及び(下)はそれぞれ上向調・下向調を示す。抑揚は凡て佐久間教授の意見に従つて東京語の語調を寫したものであり、假名文字は此の場合單に發音の符號として使用したものである。)

(一) ホンカアリマス。

(二) テホンカアリマス。

(三) ユリノハナカサキマシタ。

(四) キレーデゴザイマス。

(五) アチラデモコチラデモ、タノクサオトッテイマス。

(六) ヒトリ、フタリ、サンニン、ヨニン、ゴニン、(ロクニン、……)

(七) ニーサン、コノカワニコイカイマスカ。

(八) コノカワワ、ドコカラナカレテクルノデスカ。

(九) イロイロオセワニナッテ、アリカトーゴザイマスカ、アマリナカクナリマスカラ、モーウチエカエリマシ。

(十) ココカラミルト、マチカヒトメニミエマスカ。

右の諸例中高い音で始まつてゐる文もあるが、大部分は低く始まつてゐる。さうしてそれは文頭の單語固有の抑揚によるのであつて、日本語では初めを高く發音する語は少數であるために、文としても高く始まるものが少いといふ結果を生するのである。また「第一調」及び「第二調」型の關係では、(七)・(十)と、後で説明する(八)の或る場合のみが「第二調」であつて、他は皆「第一調」である。

次に日本語における文章抑揚の様相を英語の場合と比較しつゝなほ詳しく調べて見たい。但し日本語抑揚の様相は主として佐久間教授の研究に基づいて述べるつもりである。

先づ疑問文及び念を押す場合の音調である。肯定又は否定の答を要する問は終りが上つて「第二調」型になるのが一般の言語心理であらう。日本語でも「どなた、山口さんですか」などの疑問では、「ドナタ、ヤマクチサンデスカ」が普通である。殊に疑問助詞の「か」を省いて「山口さん」といふ形の問になれば、「ヤマクチサン」となることが絶對に必要である。(若し此の形で終りを下げれば問にはならない。)但し「アー、アノヤマクチサンデスカ」又は「ダレカトオモッタ、ヤマクチサンデスカ」においては、終りが下つて「第一調」型となるが、是は二つとも純然たる問

とは自ら趣を異にしてゐる。即ち初めの文は、例へば他の人が言つた「アレワヤマクチサンデスヨ」(但し此の場合も念を押す意味ならばヨとなる)に對してその主旨を繰り返したまでであり、第二の方は、さう言ふまでには山口さんであることが既に判明してゐるので、之も實際の間ではない。従つて何れの場合も「第一調」であるのは、言語心理上當然である。英語でも、例へば Is that the direction, isn't it? などに於いては、方向が初めから判つてゐてたゞ相手の同意を促す場合は、isn't it? は「第一調」で發音される。要するに問であるか否かは意味できまり、それに應ずる抑揚が生ずるのが通則であると言へよう。然し疑問詞で始まる問の場合は、日英語の間に次のやうな差異のあることに注意す可きである。

英語において、疑問詞で始まる普通の問が「第一調」であることは、既に述べた。日本語でも「キミワダレデス」^(ト)「コワドコデス」^(ト)「アレワナンデシー」^(ト)などは即ち「第一調」である。然し終りに「カ」を附ける場合、疑問詞を強く發音すれば終りの「カ」は普通下るであらうが、寧ろ終りの「カ」に力を入れ、ば、「カ」は上つて「第二調」となる。即ち「キミワダレデスカ」^(ト)「コワドコデスカ」^(ト)「アレワナンデスカ」^(ト)となる。なほ問としての「誰れ」「何處」といふやうな省略形の場合も「ダーレ」^(ト)「ドコ」^(ト)となる。

また念を押す場合、日本語では通則的に「第二調」である。即ち前に掲げた例文中(中)の如きその一例であり、なほ「(見えよ)せう」「……でせう」等にあつても、是が念を押すために使用される時には「第二調」となる。

次に物を數へ、列擧し、又は選擇を問ふ場合、英語では終りの項目以外は皆語尾を上げるが、日本語では各項目の語尾を下げることに例文(六)の示す通りである。但し「イチド、ニド、サンド、ヨド、ゴド、ロクド、(シチド)」に於

いて「イチ_ド、ニ_ド」の語尾が上るのは、この語本來の抑揚によるのであつて、項目中にあるからではない。且掛け
聲となれば、「イチ、ニ、サン、シ、ゴ、ロク、シチ、ハチ」の如く、凡て初めを高く發音する。また物を列擧する
場合も日本語では英語とちがひ、各項の抑揚はその單語としての抑揚のまゝであつて、列に加はつたがために特に終
りが上ることのないのは、次の例の示す通りである——「ツクエノウエニワホンヤ、カビンヤ、カミヤ、スズリバコ、
ペントインキモオイテアリマス。」また選擇を問ふ場合、日本語では例へば「オチャト、コーヒート、ココアト、ドレ
ニシマスカ」と言ふであらう。以上のやうな日本語の抑揚に對し、英語では例へば物を數へる場合、One, two, three,
four, five において、five よりなほさへ數へて行く際は各項皆それぞれ語尾を上げ、five で終る場合は five のみ
を下げる。又 Do you like tea or coffee or cocoa? にあつては、tea と coffee とは語尾を上げ、cocoa も亦、なほ
その他にも選擇し得可き飲料（例へば chocolate など）の範圍を言外に含む場合は、語尾を上げる。但し cocoa が選
擇項目の最後である際は、文章が疑問詞のない問であるに拘はらず終りを下げる。また英語では here and there;
either this or that; sink or swim といふやうな對照を表はす言ひ方では、初めの語 (here, this, sink) は語尾を上
げ、終りの語 (there, that, swim) は語尾を下げるのであるが、日本語では前掲の文例中の「アチラデモコチラデモ」
が示すやうに、對照をなす前後の句が同じ抑揚をもち得る。「アレデスカ、コレデスカ」に於いてもさうである。

次に意味未完結の前行句が、英語において通例上向調であることは、既に述べた通りであるが、日本語ではさうし
た場合、文例(九)の示す如く、下向調である。さうして日英語の文章音調におけるこの相反する通則の結果、英語で
はコンマの前は概して上向調となり、同様の場合日本語では下向調が繰り返されるのであるから、實際上においては

日英語音調の顯著な差異が茲に現はれることになる。日本人の英語の發音において、コンマの前で一一音を下げがちなのは、日本語の音調を以て英語を發音することから生ずる傾向である。

終りに、日本婦人の語調で私の注意を惹いた點を記して見たい。元來日本語の文章音調には、さきに例示したやうに、第一調型が多いのであるが、現代の日本婦人、殊に若い婦人の談話には「第二調」型即ち上向調が非常に多い。是はさきに説明したなかの「疑問文及び念を押す場合の音調」と密接な關係をもつものであるが、日本婦人の語調に「第二調」の多い原因を、私はその語法の二つの點に歸し得ると思ふ。その一つは疑問文における「(です)か」その他の省略、從つて言外含意を生ずることであり、今一つは「ね」「よ」或は婦人専用の「わ」など情緒的色彩の濃厚な助詞が文の終りに使用されることである。元來婦人の言葉遣は、民族の如何に拘らず男子よりも情緒的であり、從つて上向調となりがちであると言へるであらう。然し日本婦人の語調は、前記の如く語法の特種性と關連したものであり、上向調の情緒的助詞には近代性の躍如たるものがあると同時に、語の省略は寡言を以て婦徳の一要素とした古來の傳統を繼ぐものと言ひ得べく、且省略から生ずる含蓄は、情緒に富む上向調と合して、日本婦人のことばに言ひしれぬ奥ゆかしさと一種の彈力性とを與へるものである。但し總じて日本語における文章音調は、前にも述べたやうな次第で、英語の場合よりも曲線が細かなだけ内に柔か味を藏して居り、日本婦人の「第二調」はその柔かさのなかに、と言ふよりも柔かなるが故に、しなやかな彈力性を發揮し得るのである。

次に日本語における男女對話の例を、近頃の作家から二つばかり引用して見よう。概して男子に「第一調」が多く、女子に「第二調」が多いのは、是等の例からも明かであると思ふ。(文字の右脇の(上)(下)は、音がすり上つたり

すり下つたりする場合を示すと共に、單に前の音節に對する高低を示すためにも適用されてゐる。)

初めに夏目漱石の『虞美人艸』(中)のなかの、糸子とその兄との對話を少し引用する――

「糸公。^(上)こりや御前の座敷の方が明るくつて上等だね^(上)」

「替へたげませうか^(上)」
(上又は下)

「さうさ。^(下)替へて貰つた所で餘り儲かりさうでもないが――然しお前には上等過ぎるよ^(下)」

「上等過ぎたつて誰も使はないんだから好いちやありませんか^(下)」

「好いよ。^(下)好い事は好いが少し上等過ぎるよ。^(下)それに此裝飾物がどうも――妙齡の女子には似合はしからんものがあるぢやないか^(下)」

「何が?」^(上)

「何がつて、此松さ。^(下)こりや慥か阿父^{おとつさん}が昔盛園^{たいせいあん}で二十五圓で賣りつけられたんだらう^(上)」

「え。^(下)大事な盆栽よ。^(上)顛覆^{ひっくりかへ}しでもしようもんなら大變よ^(上)」

「ハ、ハ、是を二十五圓で賣りつけられる阿爺^{おとつさん}も阿爺^{おとうさん}だが、それを又二階迄、えつちらおつちら擔ぎ上げる御前^{おまへ}も御前^{おまへ}だね^(上)。矢張りいくら年が違つても親子は争はれないものだ^(下)」

「ホ、ハ、兄さんは餘つ程馬鹿ね^(上)」

「馬鹿だつて糸公と同じ位な程度だあね。^(上)兄弟だもの^(下)」

「おやいやだ。^(下)そりや私は無論馬鹿ですわ。^(上)馬鹿ですけれども、兄さんも馬鹿よ^(上)」

「馬鹿よか。^(下)だから御互に馬鹿よで、好いちやないか^(下)」

「だつて證據があるんですもの^(下)」

「馬鹿の證據がかい」^(上)

「え」^(下)

「そりや糸公の大發明だ。どんな證據があるんだね」^(上)

「其盆栽はね」^(上)

「うん、此盆栽は」^(上)

「其盆栽はね——知らなくつて」^(上)

「知らないとは」^(上)

「私大嫌ひよ」^(上)

「へえ、今度此方の大發明だ。ハ、ハ、嫌ひなものを、なんで又持つて來たんだ。重いだらうに」^(下)

「阿父さまが御自分で持つて入らしつたのよ」^(上)又は^(下)

次は『西日本新聞』紙上で最近完了した阿部知二氏の『故郷』(冬(三))の一節、場面は工場の事務室である——

「早瀬氏なら知つとるよ」^(下)浅井がいつた。「南洋から歸つたばかりだらう。跛足になつたつていふぢやないか」^(下)

「顔面にも疵が出來たさうよ」^(上)女秘書がいつた。

.....

「そいつあ、勇ましい話だね。——だが、結婚の御相手がもうきまつてゐるつていふぢやないか。お父さんが悪いんで延びてゐるだけだつていふぢやないか」^(下)

「それがどうしたの」^(上)

「その相手の、一色令嬢がさぞ嘆いてをられると思ふんだ」^(下)

「ひどく同情したわね」^(下)

「もちろんさ」^(下)

「だが、そんな意志の弱い女性は今頃居りませんよ」女秘書はいつて、桃江の方にふと氣がついたやうに、

「ね、大園さん、さうだわね」^(下)と聲をかけた。

附記。此の一文は昨年の秋の日本英文學會大會における講演をもとにしたものであるが、發音符號その他活字の關係等から多少變更し、終りの二つの文例も前とはちがった作家から引用した。

(昭和十八年六月廿九日)